

# 岡井 隆百首

山田富士郎 選



岡井 隆

灰黄の枝をひろぐる林みゆ亡びんとする愛恋ひとつ

『斉唱』

廃井に冬木菟を覗かんとわれらの指は組み合わされつ

常磐線わかるる深きカーヴ見ゆわれに労働の夜が来んとして

言いつのる時ぬれぬれと口腔みえ指令といえど服し難きかも

冬の日の丘わたり棲む連雀は慄悍の雄いまも率たりや

眠られぬ母のためわが誦む童話母の寝入りし後王子死す

渤海のかなた瀕死の白鳥を呼び出しており電話口まで

『土地よ、痛みを負え』

列島のすべての井戸は凍らんとして歌いおりふかき地下から

つややかに思想に向き開ききるまだおさなくて燃え易き耳

うつうつと地平をうつる雲ありてその紅はいづくへ搬ぶ

どの論理も(戦後)を生きて肉厚き故しかなる党をあなどる

父よその背後はるかにあらわれてはげしく葡萄を踏む父祖の群れ

啼きそろう喬き熊蟬 彼らさえ戦後をともしせしもの喬

いくたびか汗をおさめて立ちむかう西欧というは遂に何ならん

火を産まんためいましてがた触れあえる雌雄にて雪のなか遠ざかる

雨脚のしろき炎に包まれて暁のバス発てり 勝ちて還れ

肺尖にひとつ昼顔の花燃ゆと告げんとしつたわむ言葉は

沸点に近づくなべに苦しくも薄膜は寄る牛乳のおもてに

『朝狩』

説を替えまた説をかうたのしきのかぎりも知らに冬に入りゆく

群衆を狩れよ おもうにあかねさす夏野の朝の「群れ」に過ぎざれば

私のめぐりの葉のみくきやかに世界昏々と見えなくなりつ

海こえてかなしき婚をあせりたる権力のやわらかき部分見ゆ

組織、萌黄の忠誠をこそ求め来ぬむらさきの苗われは捧げむ

市街地をあとしぎりする機関車のくろがねの笛負えるかなしき

おびただしき無言のこにおびえては春寒の夜の過ぎむとすらむ

鳥満ちて沼ありありしエレミアはひざまずきつつ苦を浚いけむ

聞こえぬか聴かぬか天のザムザム訣れの声は雨に満ちつつ

飛ぶ雪の確氷をすぎて昏みゆくいま紛れなき男のこころ

ちかちかと抱きよせて截るしなやかな幹とわれとの世代差あわれ

苦しみつづ坐れるものを捨て置きておのれ飯食む飽き足らうまで

カムイには女の眼こそ似つかわしけれわれを刺す女の眼こそ

此処へ来よ此処へ時間に殉いてうらぎれるだけうらぎりながら

家兔の群さやさやと餌をよろこべり羨しきかなや死まで束の間

ばあらばらあばらぼねこそ響りいずれ斎藤茂吉野坂昭如

『眼底紀行』

『天河庭園集』

以上簡潔に手ばやく叙し終りうすむらさきを祀る夕ぐれ

雨は全東北を降り覆ふとき霧ながら越ゆこころの峠

玄海の春の潮のはぐくみしいろくづを売る声はさすらふ

生きがたき此の生のはてに桃植ゑて死も明かうせむそのはなざかり

原子炉の火ともしごろを魔女ひとり膝に抑へたのしむわれは

春に居てむしろ恋ほしむ冬木立簡浄の枝没日を聞ふ

薔薇抱いて湯に沈むときあふれたるかなしき音を人知るなゆめ

わたつみのいろこのみやゆながれこしたちはなの実はいかにぞだたむ

ひぐらしはいつとしもなく絶えぬれば四五日は〈蹠〉 やがて暗澹

やくぎ雲夕雲さはれ新任の任地さびしき蜂須賀小六

さんごじゆの実のなる垣にかこまれてあはれわたくし専ら私

母逝き四十九の昼すぎぬ呪といひて幹をはなるつくつく法師

歲月はさぶしき乳を頒てども復た春は来ぬ花をかかけて

かくのごとくわれもありしか青春とよびてかなしき閑暇の刑は

伊那谷をのぼる列車の彎曲の果樹園ひとつ巻きて過ぎたる

部屋内を腋窩あらはに行きにしをヒザかじりつつ想ひ出でつも

『鷲卵亭』

『歳月の贈物』

雨の谿間の小学校の桜花昭和一けたなみだぐましも

『マニエリスムの旅』

洋風の青きを揚げて海のへに時はうつろふ満ちてうつろふ

人の生の秋は翅ある生きものの数かぎりなくわれに連れそふ

ブルー・トレイン上段に眠る幻を抱きおろしたり夜半の通路へ

箸立ての箸抜きながら塩尻のそば一碗になごみふたりき

『人生の視える場所』

女とは幾重にも線条あつまりてまたしろがねの繭と思はむ

蝗あり野蜜はしとど流るればあらがはを着てヨハネ大股

右耳を夢の領地に没れながら朝妻に言ひ夕妻に言ふ

汗したたる家族のなかにしろがねの凹地となりてかなしゑわれは

くくくくと雨空に鳴る矢車や父のいのちの過ぎむあかつき

『禁忌と好色』

しづかなる旋回ののち倒れたる大つごもりの独楽を見て立つ

雨傘をはらりひろげて逢はむとす天はほのかに杉にほひたる

手をだせばとりこになるぞさらば手を、近江大津のはるのあはゆき

あぢさゐに大かたつむりみどりこにはじめての齒のあはきよるこび

飲食のまへの祈りに子と和してあたたかき汁に顔ちかづけぬ

『α(アルファ)の星』

亡ぶなら核のもとにてわれ死なむ人智はそこに暗くこころは

よろづもめ事ひきうけますといふこときあたたかき月燈りてゐたり

『五重奏のヴィオラ』

遠国にあたま巨きな児があまた死にゆくころの かたつむりかな

栗のいがまたをさなくてゆきゆきとゆるる家族を信州に置く

マーキユロのくれなるなびく少年は目を細めつつ蕎麦をすすりぬ

秋雨は滴大きく降りもすれ梅の林をあはく煙らせ

『親和力』

さいはひの浅瀬をわたる一家族提げたる靴を水に映して

かすかなる知のひびきして白拍子そらに投げたる綾繭傘あはれ

朝戸出のわれに拵けてたまきはる内なるはねのうるはしき編

運命を見返すときのまなざしと言ふといへどもさゆらぐなゆめ

今ならばさうも言へるが日没が言葉をころすときの重たさ

此の雨の向うに画家の左手のつぶすチューブの真紅あるべし

『宮殿』

ああ憂患、冷房装置ほそながき風をふき出しながら迫れば

くらやみの弟として今犬が垂れてゐる舌 泉のうへに

ささき、寄れ世界をまろく囲み終ふる究極の紐 愛がこの手に

わが生はくれなるの紐織ることしなみだの濡らす夜半ありぬとも

ヘイ 龍 カム・ヒアといふ声がするまつ暗だせつていふ声が添ふ

夜明けまで楯たての側そばには(だあれもゐない)立場たてまわが変る騎士あれど稀まれ

『神の仕事場』

天つ邦ゆざわりりつ米こめを購かふくぐつめつめのつめじゆらめく Orizaオリザ

求婚者らは騒立さわだててり遙とほかなるオデュッセウスをオデュッセイアし

関ヶ原の雪は徐行じゆぎやうを強つよふれどもこころはやらす既にまづ焉なほりぬ

ミサイルミサイルが螢あぶらのやうにとび交あふを愛咬あいをかの図ずとくらべて果敢はか無な

えいもう死者は真夏の夜をバラ園へでも出てお行き斧きりひつぎげて

吹きながら萋あつらかなたには羽根はねひろげ死すプリセツカヤが

家はいまある境から荒野あづまですそこはかとなく馬うまが匂におひて

雨雲あめぐもが南へ垂たれる 搾しぼらるるまへの乳房ちちのやうな固かたきで

岡井隆おかい たかは、つねに時代と共に大胆たいだんに変貌へんぼうし続けてきた。アララギの写実的作風から、暗喩あんゆや連作を多用した前衛短歌時代へ。さらには、口語や記号を自由に使いこなし、ふしぎな翳かげりを帯びる近年の作へと、岡井の意欲はとどまるところを知らない。そのすべてを百首で展望するのはとうてい無理だが、ここに選んだ作品からでも、おおよそのところはわかっていただろう。

岡井には十八冊の歌集がある。ここでは、『中国の世紀末』

金銀の斧のごときが鯉の背をたまゆらの喩となして寄りくる

『夢と同じもの』

いくたびかわれのすがりし宗教も憎しみをもて異端煮たりき

西欧の夕ゆふくぐもりぐもりに散りほへる白鷄しろひねかな青あをかけろかな

あさやかに照らす灯ひのもと麦むぎこがし煎る村々もほろびけらしな

ひとりびとりの夢のかたちが雲うみなんだ逐語訳して雨、足早に

はるかなる原子炉の火をしたひつつ日にひに甘く熟れゆくウラン

『ウランと白鳥』

人形の糸見えかくれするうちに人形の劇糸を消し行く

レダの脚ひらきて白鳥を容れ終るやうに運命をうけ入れて来し

辺境に医をしてつひに起たちがたき夢のはしほし松光り居き

歌の表記・ふりがなは『αの星』までは『全歌集』に準拠しています。

をのぞく十七冊から選んだ。選ぶ際には、岡井の際立った特長である、しらべのうつくしき、力強さのよく出ているものを、と心がけた。難解な歌が混じるのは避けたいが、しらべに身をまかせて読めば、歌の方から語りかけてくれるように思う。なお、『天洞庭園集』には、著者自選本と福島泰樹編集版の二種があるが、前者によった。仮名遣いは、『天洞庭園集』までは新仮名で、それ以後は旧仮名となっている。

山田富士郎(やまだ・ふじろう)「未来」編集委員)